



八戸のうわさ

by. 山本耕一郎

Yamamoto Koichiro

1969 年名古屋生まれ。筑波大学卒。英国ロイヤルカレッジオブアート大学院修了。「アサヒアートフェスティバル」、「トヨタ子どもとアーティストの出会い」などに参加。英国セントラルランカシャー大学非常勤講師、英国サリー大学非常勤講師の後、筑波大学大学院非常勤講師。まちの人たちのうわさが書かれたフキダシを商店街に貼り出す「ニッポンのうわさ」シリーズや、小学生と一緒にまちに住む人たちの記念日が書かれたカレンダーを作る「まちカレ」など、地域と深く関わるプロジェクトを展開している。

<http://kyworks.net/>

趣味や自慢、得意技、ご家族のことや悩みなど、ポジティブな情報が伝わってくる『うわさ』たちが、八戸の中心街を飾った。

フキダシを通して、まちを歩くだけでお店の方の素顔が見えて来る。道行く人とお店の方との間に見えない絆が生まれて行く。会話しなくても、あたにかいぬくもりが心から心へ広がっていく。それが山本さんの作品だ。隣同士の店の人が、長年近くにいっても知らなかったお互いの人となりを再発見することにもつながった。ご近所同士、お客さんなど、中心街全体に小さなコミュニケーションのきっかけを生み出していく。彼のアート活動は、人間の関係性を組み直すきっかけを同時多発的にまちに創り出して行く。

「はっち」建設現場前のフェンスに貼られた大きなフキダシ。それが、山本耕一郎さんのアート・プロジェクト「八戸のうわさ」のスタートだった。

2010年の夏、山本さんは八戸に滞在し、中心街の空き店舗を活用したレジデンス・スペース「はっちラボ」を拠点に、2月の「はっち」オープンに向けたプロジェクトの準備活動を開始した。山本さんは八戸に長期滞在しながら、中心街の商店の皆さんのもとを訪ね会話しながら『うわさ』のネタを聞きだした。取材したネタをアーティストの感性で整理・リライトし、フキダシの形で、『うわさ』として各店頭に掲げられた。

「この店長は新婚さんなんだって〜」、「息子さんが学級委員らしいよ」というように、お店の方の街は魅力的だ。

歴史の長いまちでは、人間同士の力関係が固定化してしまっていることが多い。もう一度その呪縛から解放されて、老いも若きも素顔の人間同士としてふれあうことができる、とたんに活力が生まれることがある。

はっちのアート・プロジェクトのねらいのひとつはそこにある。

通りを彩るまちの「うわさ」が ニケーション



2010年夏、はっちラボは「八戸のうわさ」の活動拠点になった。山本耕一郎さんが滞在するラボには、市民が自然に集まり、会話を楽しみながら「うわさバッジ」を制作したりした。街行く人が、それぞれ自分のうわさバッジを身につけてすれ違うだけで、思わずほほえみがこぼれた。

「八戸のうわさ」 2011年2月8日～3月13日
「八戸のうわさ2」 2011年8月13日～10月2日

■まちのみなさんの談話

○メガネアート八戸 後村さん

「この店がどんな店か、一般の方は口コミやネットで調べなければ分からない。『八戸のうわさ』はそうした壁を飛び越える入りやすさが面白い。」

○はちのへ額装 稲田さん

「それぞれのフキダシの内容はささやかだが、積み重ねることによって1つのしっかりとしたプロジェクトになることに感心し、まちに統一感が出たと感じた。」

○高校生ボランティアの中村さん

「フキダシ掲示を手伝ったことを通じて、まちへ行くことが習慣づきました。今まで知らなかった『まち』があって、まちへ出かけることが楽しくなりました。」





本八戸駅から中心街への道沿いにも大きなフキダシが登場。



銀行街もユーモアたっぷりの『うわさ』でぐっと親しみやすく感じる。



スマートフォンのアプリ「セカイカメラ」で、八戸の中心街を見るとたくさんのフキダシが見える。まちと人がつながるITコンテンツを、八戸のクリエイターとともに創り出した。期間中企業協賛のもと、iPhoneをはっちインフォメーションで無料貸し出し、お楽しみいただいた。



J R八戸駅。改札口を出ると駅構内の壁や窓に貼られた『うわさ』と遭遇。



駅長や駅員さんにも思わず親しみが湧いてくる。



中心街への玄関口、本八戸駅も『うわさ』で楽しい空間に変身。



山本さんの作業風景。
厳冬の八戸のまちなかが、黄色いフキダシで彩られ、はあっと明るく感じられた。



小野画廊の前でフキダシ貼りに立ち合う小野さん。
自分の『うわさ』に思わず苦笑。

メガネアート八戸の後村さん(右)は「この店がどんな店か、一般の方は口コミやネットで調べなければ分からない。“八戸のうわさ”はそうした壁を飛び越える入りやすさが面白い。」と語る。





商店街のお店一軒一軒をまわって取材を行う山本さん
楽しいフキダシは丁寧な取材から生まれてくる。



2011年夏、第2弾となる「八戸のうわさ2」プロジェクトが開始した。本八戸通りなどまでエリアを拡大して、『うわさ』の掲出店舗数も大幅に増え「うわさ2」のシンボルとなった「飯村中Tシャツ」を着た山本さんや、はっちスタッフが店舗取材で街へ繰り出し、まちのみなさんとふれあいながら、『うわさ』を取材した。

多いときには、数回にわたり取材を行った。取材を通して見えてくる中心街。そして、「うわさ」を通して見えてくる、街を支えてきた人々の姿や長い時間。店の魅力や歴史、人柄を再発見するプロジェクトとなった。

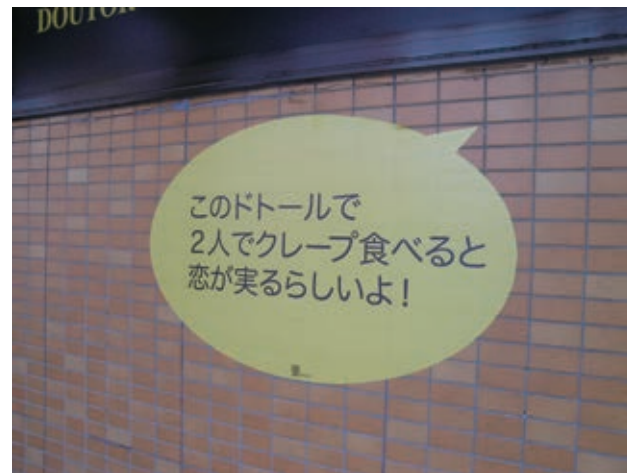
長年隣り同士だったのに知らなかったことを、このプロジェクトを通して知った方も多い。



お店に入ってみたくするような、さまざまな「うわさ」の数々。



外国人にも八戸のうわさを楽しんでほしい。
英語のフキダシも制作した。



山本耕一郎さんはアーティスト・イン・レジデンスがまちに何をもたらすのかを、身をもって示してくれた。

毎日過ごしている八戸の日常を見つめる、もうひとつの目を、彼は市民に与えてくれた。その目で見える八戸の中心街には、いきいきと活力に満ちた人々の姿が存在した。そして、既成概念に縛られている自分自身の姿にもふと気づかせてくれた。

アートとまちが出会うとき、私たちは高いハードルを楽々と飛び越してしまうこともあるのだ。





フキダシをプリントアウトした大きなカッティングシートをひとつひとつ丁寧に切り取って、設営の準備をする。
ボランティアのみなさん、はっちのスタッフも代わる代わる作業に参加した。
はっち5階のレジデンス全体が、アトリエ化した。



山本さんは、取材、フキダシ制作、貼り出し作業を行うはっちでのレジデンスの間、中心街で出会った八戸の人々をスナップ写真におさめて、はっち館内に「はちのへ・出逢い景」として貼り出した。

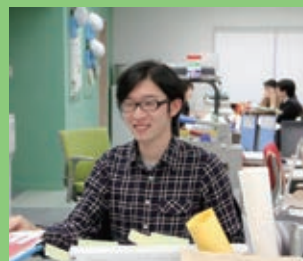
そこには、八戸というまちで生きるさまざまな人々の、いきいきとした表情が切り取られていた。「うわさ」やさりげない日常を切り取り提示することで、社会の複雑な関係性の中で、見えにくくなっている人々の“素”を、彼は私たちに見せてくれるのである。

私たちは、よく知っていると思い込んでいた人の思いもかけない横顔に遭遇し、とまどいながらもその人への認識を新たにする。また信じて疑わなかった自分自身の“目”に向き合う体験をする。

こうして、人々をそのプロジェクトの主体にしていくことこそ、現代アートプロジェクトの力である。利害関係や社会的な枠組というハードルを、私たちにやすやすと越えさせてくれる瞬間を、まちに飛び出したアートは創り出すことがある。



「八戸のつわさ」は
まちの人たちをいつのまにか主役にした。



（企画運営グループ
コーディネーター）
渡邊 曜平

人気で、県外に八戸通が増えたかも？

…そうそう、「つわさ」は観光客の方にも

2012年は南郷区の家に住み、そこを拠点

としたプロジェクトに挑戦しています。今後

の活躍が楽しみです。

山本さんはその後、なんと八戸に移住。

2012年は南郷区の家に住み、そこを拠点

としたプロジェクトに挑戦しています。今後

の活躍が楽しみです。

山本さんはその後、なんと八戸に移住。

2012年は南郷区の家に住み、そこを拠点

としたプロジェクトに挑戦しています。今後

の活躍が楽しみです。

山本さんはその後、なんと八戸に移住。

2012年は南郷区の家に住み、そこを拠点

としたプロジェクトに挑戦しています。今後

の活躍が楽しみです。

山本さんはその後、なんと八戸に移住。

2012年は南郷区の家に住み、そこを拠点

としたプロジェクトに挑戦しています。今後

の活躍が楽しみです。



浴衣姿の見返り美人が
いるらしいよ



365 日ほとんど1日も休まず
お店を出しているらしいよ
スゴイ!!

新しく来た課長さんは
お酒に関する
伝説を持っているらしい

開業 3 年から
創業しているんだって

話し出したら
止まらない従業員が
いるらしいよ



八戸のうわさ 2

hachinohe no UWASA 2

まっぷ

埼玉で UFO を見た!
と言うお客さんが
よく来るらしいよ

この店長さんは
75~85 年
歌謡曲が大好きで
口だけでわかるらしい

彼には
競馬選手が
いるらしい

久しぶりの
男性ニューフェイスが登場で
好感度、売上UPに
期待

※「八戸のうわさ 2」マップより転載

hachinohe no UWASA 2

八戸のうわさ 2

by. 山本耕一郎

8月13日(土)~10月2日(日)
八戸市中心街
廿三町・十三町・三日町
八日町・十八町・六日町
長崎町・東区小路
ヤグラ横町・番町・本八戸駅通り
本八戸駅・八戸駅

地元じゃ
負け知らず
らしいよ

3食カレーでも
いいらしい

3食カレー付き
らしい

日本一に
なったことが
あるらしい

闘いでも
スゴいらしい

はっちのからくり時計に
拍手がきこえるらしいよ
(1階から2階まで)

友達が集まり
やすいです...

甘いものには
目がいらしい

8月で
とよむわけ

「八戸のうわさ」は、アーティスト山本耕一郎による、
人と人の絆をつなぐアート・プロジェクトです。
八戸市中心街の人たちの笑顔、趣味や楽しみ、暮らしたことなどを
「うわさ」風の文様にとり、フキダシ型のシールにして貼りだします。
この裏、見えないコミュニケーションの糸が、人と人との絆を描きます。

〇主催 八戸市 八戸市アート・プロジェクト実行委員会
〇協賛 八戸市 八戸市観光振興局 八戸市商工会館 八戸市役所
〇協力 八戸市観光振興局 八戸市商工会館 八戸市役所

〇お問い合わせ
八戸市観光振興局 八戸市アート・プロジェクト実行委員会
〒031-0032 青森県八戸市三日町 1-1
TEL: 0178-22-0000
FAX: 0178-22-0008
Mail: hachinohe@hachinohe-uwasa.jp
URL: http://hachinohe-uwasa.jp

店には
ストの得意な
さんがいるらしいよ



このスタッフの1人は
休みの日はもっぱら
お風呂なんだからって

温泉ドームホテルで
温泉の湯に
入られたスタッフは
いるんだって





2回目のプロジェクトでは、本八戸駅通りや十八日町、横丁などが新たにエリアとして追加となり、約1500枚以上の緑色のフキダシが街を彩った。

今回新たに参加した本八戸駅通りの振興会会長をつとめる「はちのへ額装」の稲田充広さんは、「それぞれのフキダシの内容はささやかだが、積み重ねることのでひとつのしっかりしたプロジェクトになる。まちに統一感が出たと感じた。空洞化の進む本八戸駅通りとしては久しぶりのイベントで、参加して嬉しかった」と語ってくれた。

専門店が多く並ぶ中心街。そこはお店の方たちが長い時間を通して蓄積してきた、それぞれの専門の情報や知識が詰まった街なのだ。そんな中心街の魅力と価値を、市民みんなで共有するきっかけを創り出したい。そんな思いから、山本耕一郎さんに「まちのうわき」プロジェクトを八戸の中心街で行っていただくことにした。

市民協働で行ったへえウォーキングツアーも、中心街のおもしろさに触れるきっかけとなった。

八戸の中心街は、ひとつひとつのお店や事業所の方々の日々の努力の結晶だ。未来を担う子どもたち、若者たちにとっても魅力的な街であり続けられるよう、街はみんなの関心空間であり続けなければならない。はっちはその一助を担う装置なのである。

